



人生が変わった「一時間」

どんぐり代（神奈川県）

「訪問販売」と聞くと、小学生だった頃に教材を売りに来たOさんのことを思い出す。一時間で、私の人生を変えてくれた人だ。

あの日、学校から帰ると母とOさんが私を待っていた。Oさんはさっそく教材を紹介し始めるが、私がまったく興味を持っていないことに気づいたのだろう。早々に説明をやめ、勉強机を見せてほしいと言う。

ギョツとした。机の上は学校のプリントやマンガ本などが山のように積まれている。





躊躇していると、母は勝手に私の部屋に案内してしまう。Oさんは机を見るなり「私の子供の頃、もっとすごかったわよ」と、私の恥ずかしさを笑い飛ばし、机上に並んでいる綺麗なままのドリルを手を取った。

「あんまり、やっていないのかな？」

母がぼやいた。

「評判が良いのを選んでいろいろ買ってあげているのに、まったくやらないんですよ」

私が「やる気が出ない」と答えると、Oさんは私に言った。

「一冊のドリルを何度も繰り返してやってごらん。薄くても簡単なものでも良いの。た





だし、自分で選ぶこと。かならず、やる気がでるから」

私の目をじっと見て話すOさんの顔は真剣そのもので、思わず背筋がピンと伸びた。そして魔法にかけられたかのように、ふっと、その言葉に従ってみようと思ったのだ。

結局、Oさんは持ってきた教材を売ろうとはせずにそのまま帰っていった。

その後、母と書店に行き、私は初めて自分でドリルを選んだ。購入したのは薄くてイラストが多く入った簡単そうなもの。母は口をはさむことはなかったが、チクリと言った。

「自分で選んだのだから、言い訳はなしよ」

帰宅し、自分から進んで机を片付け、ドリルに取り組んだ。簡単なものを選んだの





でマルばかりだ。それが嬉しくてドリルに取り組む時間が増えた。同じドリルを何度も繰り返すことで、そのたびにマルが増える。勉強が楽しくなり、成績は少しずつ伸びていった。「自分で選ぶ」ことの大切さを知り、そこに責任が伴うことに気づいたのだ。

大人になり、当時のことを母と振り返ったことがある。教材を鞆にしまつて帰ろうとするOさんに母が恐縮すると、言われたそうだ。「私が訪問販売を始めたのは相手を正しく見て正しく売りたいから。お客様に合わない物を売りつけるのは販売員として反則です」

そして、母はOさんから「自立させること」の大切さを学んだと話し、「過干渉のま





までいたら、今頃あなたは大変なことになっていた」と苦笑した。実際、あの「一時間」を境に、母は私への接し方が大きく変わった。

あの日から四十年以上が経つ。仕事中、時折、〇さんを思い出し背筋が伸びる。彼女は「訪問」するからこそできる正しい販売をしていた。相手を「正しく見て正しく売る」。

今の私の立場だからこそできることは何か、考えさせられる。

【令和元年度・佳作】

